2015年
12月8日
火曜日

正義感と冒険心

藤井　和夫　教授（西洋経済史）

卒業式の季節になると、大学が、若者たちを社会に送り出す最後の門であると改めて思います。新しい世界に踏み出そうとする彼らの笑顔に未来への希望と期待が輝きますが、一方で緊張と不安の色合いも少なからず感じられます。活躍する場を与えられたという安堵感はあるものの、未知の世界に一人で乗り出す彼らに、自分自身の知識、能力、経験への自信が、どうやら驚くほど欠けているのです。

現在の若者の特徴として、モチベーションが低いと言われます。何かをめざして「よーし、やってやろう」という意欲が湧いてこない。求めるのは目の前の快適な空間で、そこでリラックスできれば良い。人間関係も、安心し合えるだけの薄い関係が好まれる。そして彼らが最も嫌うのが「ノイズ」であり、平穏な空気の中で、自分が異質な存在であると思われることをひどく恐れる。若者のますます進む「内向き志向」がそんな風に説明されます。

本学の卒業生について、裏方にあって人を支えるのをいとわない献身的なメンタリティをもつとか、他人を思う、他人の心に寄り添うことが自然にできるとか言われたことがあります。「マスタリー・フォア・サービス」をスクール・モットーにする大学としてうれしくもありますが、あまりに優しい、ものわかりがいいという評判に、大学で少し「奉仕」が強調され過ぎているのかなと気になります。

若者が一所懸命何かを求めることもなく、ぶつかることを通して人と深く交わる経験もないのでは、彼らに自分の支えとなる自信など湧いてくるはずがありません。大学の果たす役割について、身近な人やメディアを通して形成されてきた若者の狭い世界のイメージをぶちこわし、今まで出会ったことのないような変な人たちや知らなかった文化や学問の世界にできるだけたくさん出会える場、それまで信じ込んできた固定的な世界観をリセットさせ、判断のものさしが壊れるような経験をする場であるべきだといわれます。大学では、若者が変なものに出会い、ぶつかることが期待されているのです。

若者には、彼らにとって居心地のいい優しさや正義感を求める以上に、心がわくわくする冒険の機会を与えてあげたい。グローバルな競争社会の中で、求められるのは開かれた積極的な精神であり、未知の世界に関心を持ち、新しいものにチャレンジして、異文化の中でリスクをとることです。「リスク」と「不正」とは異なり、「大もうけ」と「ボロもうけ」とは違います。その勇気によって夢を叶えて信じられないくらい豊かになっていいのです。大学では、そんなメッセージを若者に伝えてあげたいものです。

歴史にお手本があります。ヨーロッパがあれほど豊かに発展してきたのも、彼らが中世以来、仲間内の取引を超えて見知らぬ人々と商業を展開してきたからであり、その冒険心と共通のルールを作り上げる相互理解の積み重ねの努力があの繁栄をもたらしたのです。ただ見習いたいヨーロッパで、難民流入と大規模テロ以降、異質なものを恐れ、排除しようとする変化が見られることがとても気になりますが。

■